

岬の教会跡

1571 年以降、ポルトガルの貿易船が来航していた長崎には多くのヨーロッパの商人や宣教師が住むようになりました。1580 年、キリシタン大名大村純忠は長崎をイエズス会に寄進し、イエズス会は 1587 年まで長崎を直轄しました。当時、この場所は長崎の細長い岬(実は長崎とは「長い岬」という意味です)の先端からすぐ先の海でした。下層部は 400 年前のものであるこの場所の石垣は、当時の陸地の際涯につくられていました。

この石垣の上、岬の先端のどこかに「岬の教会」(文字通り、岬の先端にある教会という意味)と呼ばれる教会が立っていました。この教会は 1601 年に「被昇天の聖母教会堂」となり、日本におけるイエズス会の拠点の役割を担いました。この教会は、江戸幕府二代将軍徳川秀忠がキリスト教の禁教令を出した 1614 年に破壊されました。教会の土地は生糸商人の手に渡りました。(ポルトガル人やスペイン人によって中国から輸入された絹糸は国内で採掘される銀と引き換えに購入されていました。) 1633 年、長崎奉行所がここに移されました。後に、奉行所は長崎県庁に建て替えられ、この庁舎は数年前までこの場所に立っていました。現在発掘調査が行われており、多くの石垣や屋根瓦が発見されています。